人とペットが共存できる公園の整備へ向けて

○はじめに

日本では近年やすらぎを求めた動物の飼育が増えており、いわゆる昨今のペットブームの到来により、登録頭数は 500 万頭を超え、登録されていないものについても含めるとその頭数は 1000 万頭を超えるとも言われている。これは日本国民の約 10 人に 1 人がペットを飼っている計算になり、世帯数に換算すると約 2 割の世帯でペットが飼育されている。なかでも犬の頭数はその大部分を占めており、散歩時の糞の始末やその他トラブルなど飼い主のマナーによるところの影響が大きい。

しかし、欧米に比べてペットに対する意識の後進国である我が国は、ペットと共存するための整備が立ち遅れており、これらのことから、良好な住環境維持のため、さらにはペットを飼っている人もいない人もお互いに安心して余暇を楽しむためには、公共の場でのペットに関連する施設の整備が急務であると考えられる。いずれにせよ、これまでとは異なる視点でのレクリエーションの変化に応じた公園や施設の整備が望まれる。

本提案では、ペット連れの人々が安心して利用できる公園を整備することで、子供や老人さらにはその他の公園利用者と共存できる、すべての利用者にとっての安全で快適な公園空間の創出を目的とする。

○ドッグランについて

ドッグランとはその名の通り、主に犬専用のフェンスに囲まれた広場をノーリード（引き綱なし）で自由に走り回ることができる空間である。ドッグランの発祥はニューヨークであり、日本と同じくペットブームによってペットが増加し、自由に遊ばせられる場所がほしいという飼い主達の声が高まり、市への働きかけによって実現された。その後、他の公園や海外にまで設置され始め、一般的なものとなってきている。日本では公営のドッグランは希少であり、馴染みの薄いものだが、数箇所で設置されはじめており、また昨年、東京の都立公園に試験的に設置され話題になった。

今回、このドッグランの設置やその他の整備により、公園という共有の場からペットや飼い主を規制により締め出すのではなくて、人と動物が集い、ふれあい、楽しめる空間を公園内に創り、動物が好きな人も、そうでない人も快適に共存できる方法を提案する。

○公園の整備内容

人とペットが共存できる公園の整備はドッグランの設置を中心として、以下３つを柱とする。

１．ドッグランの設置

基本的に犬は走ることを好むが、欧米に比べ日本の宅地は狭小であり、また近隣に安心して利用できる十分な公園が少ない。さらに一日中鎖に繋がれて飼われていることが多い犬たちは、十分な散歩ができずに運動不足になり、犬たちのフラストレーションは

増え続け、これがまたトラブルの一因にもなるという悪循環を引き起こす。よって、公園内にドッグランを設置し、犬が自由に走り回れる空間を整備する。もちろん自由といっても、しつけができている等最低限のマナーを守る必要があるが、不特定多数の人たちが場所を共有して利用することから、お互いに声を掛け合いうことで、コミュニティ形成の場にもなり得る。また、事情で動物を飼えない人や子供、お年よりなどが地域で気軽に動物に触れ合える、アニマルセラピーにも利用できる空間ともなる。

２．木陰空間の確保

地球温暖化の影響もあるせいか、日本の夏の平均気温は年々上昇していっている。現在の公園にあるような形ばかりの植樹ではその気温を下げるどころか、日陰を確保することすら難しく、このような公園の夏場の利用は人間にとっても動物にとっても厳しいものである。よって夏場でも森林浴を楽しめ、自然を味わうことのできる比較的規模の大きい森林を創出する。森林内には歩きやすく広めの散歩道（遊歩道）や休憩ポイントを設け、人やペットが気軽に散策を楽しめる空間とする。

３．水辺空間の整備

都市には気軽に訪れることのできる親水空間が非常に少なくなってきている。よって公園内には山林とともに自然に近い形で擬似河川（小川）を設ける。ここでは子供が遊ぶ親水広場を上流に設置し、下流側をドッグラン内に設け、ペットが使用できる水辺空間とすることで、それぞれが自然の中で水遊びを楽しめる空間とする。

○おわりに

これまでは公共の空間から、ペットなどの動物を締め出すことを前提に施設整備が進められてきたが、先にも述べたようにこれだけ多くの家庭において飼育されている状況から、現状に目をそらさず、共存を考えていかなかればならない時期に来ているのではないだろうか。

以上の提案は比較的大規模な公園に適用することを想定したものだが、地区レベルの小規模公園での簡易ドッグランの設置による住み分けや、公園に限らず、人やペットが安全で快適に移動できるような歩車分離空間の整備など、身近なところから改善していけることもある。そしてこれらが実現し、お互いが理解して共存していける空間が拡がることで、人間にとっても動物にとっても、さらなる住環境の向上に繋がっていくのではないだろうか。

以上